

本日のプログラム

例会 第2756回

- 1.開会点鐘
- 2.ロータリーソング
- 3.ビジター紹介
- 5.会食
- 6.会長挨拶
- 7.幹事報告
- 8.出席報告
- 9.スマイルBOX
- 10.卓話：南谷桂子君
- 11.閉会点鐘

例会の予定

- ・3月22日(金)
卓話：室伏 学君
- ・4月5日(金)
卓話：地区社会国際
委員長 小野良太郎君
- ・4月12日(金)
卓話：県議会議員
高橋延幸様
- ・4月19日(金)
卓話：真鶴町長
宇賀一章様



会長挨拶

一昨日、会長幹事会が行われましたのでご報告させていただきます。

①来年度地区カレンダーより

大きな行事といたしまして

- 1) 9月6日(金)ガバナー公式訪問になっております。
今回は早いスケジュールですが、宜しくお願いします。
- 2) 10月20日(日)地区大会相模原女子大学グリーンホールです。
- 3) 11月30日(土)新会員の集いです。
対象者の方は、事前のスケジュールを空けて参加を宜しくお願いします。
- 4) 2020年1月24日(金)は湯河原ホストのIMです。
来月4月21日(日)地区研修会を対象者の方は参加をお願いします。
先週もお伝えしましたが、当日は湯河原駅9時45分出発です。
宜しくお願いします。

②来年度湯河原からの地区役員・委員

「地区研究委員会」神谷さん「青少年交換」石田さん「地区公共イメージ」小倉です。宜しくお願いします。

③入会予測について

湯河原では、2名選出させて頂いております。(T氏・K氏)
他に候補がございましたら、是非お声変えくださいますよう宜しくお願いします。

④「My Rotary」登録について

一番指摘されたのは、「My Rotary」の登録が湯河原は25名中7名ということで、目標は40%でないと4月27日「My Rotary セミナー」に出席しないと行けません。
現在登録されている方は、高杉さん、渡辺さん、神谷さん、室伏さん、石田さん、小倉さん6名です。

あと、3～4名以上登録でとりあえず40%になり、
セミナーに参加しなくて済みますので、是非一人でも多く登録を宜しくお願いします。



幹事報告

幹事報告
連絡事項
なし
なし

出席報告	ゲスト 1名	ビジター 1名	会員 25名
	欠席 7名 (免除者2名)	前回の修正出席率	91.30%
	出席率 78.26%	前々回の修正出席率	79.17%

事前メイクアップ 0名
ゲスト サッポロビール株式会社 杉山将太 様
ビジター 根本克彦君 (箱根RC)

第2780地区 第9グループ

湯河原
ロータリークラブ

会長 石田 浩二
幹事 小倉 高代

事務所 神奈川県足柄下郡湯河原町宮上
湯河原町宮上566
湯河原町温泉観光協会内

例会場 静岡県熱海市泉 107
ニューウェルシティ湯河原
例会日 毎週金曜日 12:30～13:30



平成31年3月15日(金)

天候 晴れ

合唱 それでこそ
ロータリー

Rotary

国際ロータリー2018-19
RI会長 バリー・ラシン

第2780地区
ガバナー 脇 洋一郎



インスピレーションになろう

- ・ 会員誕生日 平間章弘君 (3/15)
- ・ 結婚記念日 佐藤泰文君 (3/10)
- ・ 入会記念日 浅田真隆君 (36年・S58.1.7)
- ・ 根本克彦君 (箱根RC)

I Mでは大変お世話になりました。これからもメイキャップさせていただきます。まだまだ若輩者です。ご指導宜しくお願い致します。箱根へも是非メイキャップお待ちしております。

- ・ 神谷一博君

本日は根本支社長様、杉山主任様湯河原ロータリークラブへお越し頂きまして大変ありがとうございます。根本様には過日セミナー等で大変お世話になりましたありがとうございました。



卓話：南谷桂子君

みなさん、こんにちは。南谷桂子と申します。

私は昨年の11月下旬から会員になりました。まだまだ不慣れなことばかりで、ロータリークラブに貢献したいと思いつつ、なかなかできない状況です。そんな中で会員の皆様がいろいろと教えて下さり、またサポートもしていただいております。中でも石田会長をはじめ、副会長の杉山さん、幹事の小倉さん、そして私を推薦して下さいました神谷さんには大変お世話になっております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

さて今日は「卓話」という大役を仰せつかり、大変光栄ではございますが、一方では何についてお話したらよいのかと頭をひねっております。湯河原に長く住んでおられる皆さまを前にして、私のような新参者が湯河原について語る資格など到底ございません。かと言って日本の時世や歴史文化を語るほどの知識も教養もございません。それでは一体何をお話ししたらよいものか？

そこで、とりあえずは皆さまに私のことを知っていただこうと、自己紹介を兼ねて自分が生きてきた四半世紀について語るのが最も妥当なのではないか。なぜ今、こうして湯河原に住まうことになったのか？ フランス料理屋の主として、どうしてここでお店を開くことになったのか？

そういったことなどをお話ししようと思います。それではよろしく願いいたします。

私は東京、日本橋人形町に生まれました。父は写真屋を営んでおり、当時 DPE と呼ばれる白黒写真の現像所を営んでいました。時代は白黒写真全盛期、その波に乗り毎晩、徹夜・徹夜の忙し。店では銀幕のスターのプロマイドなども扱っていた父の影響から、私は子供のころから映画好き少女でした。

日本も終戦から15年を経て「もはや終戦ではない」。そんな時代の流れから国民の生活レベルもアップ。白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫と、昭和の「三種の神器」が誕生しました。娯楽として写真ブームが到来し、家業も飛躍的に成長しました。それまでの日本橋から麻布に引っ越しして、父は貸しスタジオを立ち上げました。日本で初めてのレンタルスタジオだったかと思います。

当時、若者文化の象徴だったグループサウンズ全盛期。レコードのジャケットの撮影ということで、我が家にもタイガースのジュリーやスパイダースのマチャアキ、テンプターズのショーケンなどと時代の寵児と呼ばれるスターが撮影に訪れ、直接握手をしてもらってはサインをもらうという幸運に恵まれました。それが私の人生において最も輝いていた時代だったかもしれません。

一方、母は家業を手伝う傍ら、家計を支えてゆくために洋装店を営んでいました。昭和時代を生きる女性にとって、洋服をするのはたしなみだったようで、母もその例外ではありませんでした。家にはお針子さんが3~4人いました。私たち子どもたちの服はすべて母の手作り。ぬいぐるみなどもすべて自家製でした。でも内心、私はおもちゃぐらいみんなと同じように買って遊んで遊びたかったのを覚えています。

母はその時代にしては大変モダンでエレガントでした。当時はやっていたクリスチャンディオールやニールックとかココシャネルのツイードのシャネルスーツなどという言葉が飛び交っていた時代。フランスのファッション雑誌 VOGUE や ELLE, OFFICIEL などというきらびやかな雑誌が家の中に普通に置いてありました。子供ながらも身近にパリが家の中にあっただような感じでした。

そんな子供時代を過ごしていた私にとって「外国」は憧れの対象でした。思春期を迎えると、アランドロンの「太陽がいっぱい」という映画が大ヒットし、彼の目の美しさにほれ込んで、いつしか彼の映画を吹き替えなしで観てみたい。彼のフランス語を直接聞いてみたいというミーハーな理由からフランス語を始めました。15歳の時でした。私はすっかりフランスという国の文化歴史にも魅せられて、東京にあるアテネフランセという語学学校に通い始め、いつしか心はフランスに向いていました。チャンスが訪れたのは18歳の頃。当時外交官をしていた従兄がスイスのジュネーヴに赴任することになったのです。ジュネーヴはフランス語圏です。

こんなチャンスに逃す手はありません。親を説得して「一年間だけ」という約束で日本を旅立ちました。しかし、その約束が結局は45年間にも及ぶことになるなどとは誰が想像したことでしょうか。こうして私の人生の第二ステージが始まったのです。

しかし、スイスに移り住んではみたものの、私の孤独は頂点に達していました。高校を卒業し大学に進んだクラスメートたちからは新しい大学生活の楽しさを手紙でつづってきました。そんな現実を知るにつけ、なんで自分はその道を選ばなかったのだろう。なんでこんな知らない場所にひとり悶々としているのだろう。心の底から後悔だけが先立ち、何度もひとり涙していました。

しかし、試練はまだ続きました。従兄ファミリーがスイスからオーストリアのウィーンに赴任することが決まったのです。オーストリアはドイツ語圏です。もはや私は彼らと別れることを決心しました。帰国するという選択肢もありました。しかし私の中には今、帰国したらフランス語も中途半端、大学にも入れない。ここでもうひと踏ん張り頑張ってみよう。つたないフランス語ではありましたがチャレンジしてみよう。そう決心して猛勉強の末、フランスの大学に入学が決まりました。南フランスの大学で、その後、2年間勉強してフランス語教師の資格を取りました。将来はフランス語の通訳かフランス語教師になろう……。それが私の夢でもありました。

しかし……

人生とは不思議なものです。何かを始めるときには楽しいことと悲しいことが隣り合わせです。私は孤独を克服するためにしていたことが一つありました。それは文章を書くということです。心の寂しさに打ち勝つために、書くことによって心の対話をしていたのだと思います。それはやがて自分の中でストーリーを想像しイマジネーションを膨らませて物語を紡いでゆくことに変わっていききました。こんなに楽しいことはありません。

そしてもうひとつ。外国に長く住んでいると少しずつ次第に言葉を忘れていきます。私は日本語を忘れないために、ただひたすらノートに日記を書き綴りました。それがいつしかジャーナリストになるための基礎を作り上げてくれたのかもしれない。世の中を俯瞰して観ること。そして自分の視点を忘れないこと。その二つが私の取材人生にとって礎だったように思います。

こうして私のフランスでの生活は次第に安定してきました。通訳だとかフランス語教師という言葉は武器に仕事するのは自分には向いていない。言葉とは自分を表現するための手段でしかない。それは音楽家が五線に音符を書くこと、アスリートが強靭な力を身に着けるために筋トレするようなものです。私にとってフランス語はもはや自分を表現するための手段でしかないこと。そんな風にならなくなっていききました。

海外に住んでいると様々な人に出会います。勿論、日本人だけではなく。外国人も同じです。バックグラウンドの異なる人、価値観が異なる人、宗教や肌の色の違う人。しかし共通して言えることは、みんな幸せを求めて必死に生きていることです。それは間違いなく国籍とは無関係にすべての人類の共通項でもあります。

多くの取材を通して私は世界の一隅と呼ばれる人たちと会うチャンスに恵まれました。アランドロンこそいまだに会えませんが彼の長年の恋人、今は亡きミレイユダルクは私の親友でもありました。同じくパリ生活の長い岸恵子さんは私の尊敬する大女優です。シャンソン歌手のシャルル・アズナブールさん、俳優のジャン・レノさんとも懇意にさせていただきました。世界的な指揮者のウィリアム・クリスティーンさんとも同じNPOで活動していました。世界で一流と呼ばれる方たちはみんながむしゃらに生きています。そんながむしゃらさが同じ仲間として生きているという感覚で接触できることがパリという国際都市に住んでいることの意味かもしれません。

今、湯河原に住んでいる私は、ひとりのエトランゼとしてここに住んでいるような気がします。もともと世界中どこに住んでいても多分、自分自身は変わらないと思っている私にとって、パリにしようが東京にしようが、あるいはアフリカの砂漠にしようが、自分自身は何も変わらないと思っています。ですから湯河原に住んでいても何の違和感も感じません。日本語が通じるだけでもとても恵まれていると感じています。

よく「南谷さんは海外に住んでいらっしゃるんですね？ 何年ぐらい?」「はい、45年間です」そう答えると「何! 45年間! 全然、そんな風には見えない!」と。それは私にとっては大の賛辞です。海外生活の長い人独特の雰囲気というものがあります。とうてい日本では通用しない人、特におフランスでは。しかし私にとっての外国生活というのは日本の生活の延長でしかありません。それは日本人としてのアイデンティティーの延長です。

私は長いフランスでの生活のなかでふたつのNPO活動に参加していました。ひとつは「隣人祭り」。フランス語ではFete des voisins, 英語ではNeighbour's dayと言います。そしてもうひとつは「ジャルダン・ド・コカーニュ」。フランス語でJardin de Cpcagne、桃源郷という意味です。

前者は地域コミュニティの再生です。まずは同じマンションに住んでいる住民同士が知り合うことがすべてに於いてのスタートです。日本でも「向こう三軒両隣り」という言葉があります。お隣さんはみんな助け合いの精神です。5月の最終金曜日の夕方、ひとり一品、食べ物でも飲み物でもいいから持参してテーブルを囲んでおしゃべりするというたわいもない集会です。しかし、そのたわいのなさが長く続くのです。1991年にパリの一地区でスタートした活動が現在ではフランスでは30年間続いています。2004年にはEU全域に広まりました。

そして今では世界 30 カ国、1450 都市、3000 万人の人たちが同時に集うお祭りに発展しました。

日本でも毎年 5 月に東京の新宿御苑で開催されます。

この NPO を通じて一つ感じたことがあります。市民参加型のイベントが大きくなればなるほど「引いてしまう人」がいるということです。もともと孤独とか孤立、或いはお年寄りの孤独死といったものを克服するためにできるだけ多くの人たちに参加を呼び掛けた NPO ですが、皮肉なことにお祭り化してしまうことで行きたくない、入れないという人たちが大勢いることです。本来ならば、そういう人たちにこそ参加してほしい。それでは参加できない人たちはどこに行くのだろうか？ そんな人たちに手を差し伸べているのが「ジャルダン・ド・コカーニュ」という NPO です。

こちらは社会的弱者と呼ばれる人たちを農業によって社会復帰を果たすお手伝いをしようというものです。社会的弱者？ という言葉さえ知らなかった私。ある取材を通じて知りました。

それはエコロジーの取材のときです。ヨーロッパではじめてエコラベルを取得したフランスのとある田舎にあるホテルを取材した時のこと。オーナーが「使っている素材はすべて半径 30km 以内で調達したものばかり。レストランで使う食材もすぐ隣にある社会的弱者が作った有機栽培で採れたものばかり」。社会的弱者？ その意味を教えてもらった時にはじめて、そういうカテゴリーの人たちが存在することを知ったのです。すぐにオーナーに連れてもらってその畑を訪ねました。

そのふたつの NPO に共通することは「食べること」です。

テーブルを囲んでみんなで美味しいものを食べれば、人は心を開いていくものです。そんな体験を通じて、私は食べることの重要性というものに着眼しています。

今、湯河原にフランスの家庭料理の店をオープンしたのはそんな理由からです。若いフランス人の料理人・サービス人とスタッフをパリから連れてきています。それは日本の人手不足という現実もありますが、それ以前にフランスの若者たち、モチベーションの高い若者たちに日本を見せることの意味、私も若い時にフランスに行きました。そこで観、聞いたことは一生の宝になりました。そんなチャンスを彼らにも体験してほしい。

そしてもうひとつは、私はフランスという国から実に多くのことを学ばせてもらいました。その感謝の意味を込めて、今度は私がフランスにお返しをする番だと思っています。

長く海外に住んでいた私の経験が日本に住んでいる日本人の方たちに何ができるのか？ 日本を一度も離れたことのない人たちに海外のすばらしさをお伝えするのが私の使命なのではないか？ そんなことを考えながら今日を過ごしています。

来年は東京オリンピックが開催されます。ひとりでも多くの日本人の方たちが海外の人たちと出会えるチャンスを是非とも謳歌してほしいと思います。

本日はこれで時間が参りました。とりあえず今日の卓話はこれで終わりにしたいと思います。皆さま、ご静聴ありがとうございました。

